

医師の手首に指を当てて脈を診察する渡辺医師。「脈診」は漢方では重要な診察の一つで、脈の強さや回数などからその人の体質を探っていく。



医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く!

ニッポンの医療現場 第28回

意外と知られていない!? インフルエンザやがん治療にも使われる「漢方」の現在

「漢方」は、日本で発達した独自の伝統医学。いままさにインフルエンザの“特効薬”などとして、注目されるようになっている。今回はそんな古くて新しい漢方の最新事情について取材し、その可能性を探った。

症状や個人差で薬が違いう
オーダーメイド医療

毎年冬になると猛威をふるうインフルエンザ。今年もすでに流行が始まったが、このインフルエンザに対して、有効な治療として注目されているのが、漢方薬だ。2009年、世界中を震撼させた新型インフルエンザ流行の際にも、漢方薬がよく効いたとして、ニュースになった。

漢方は中国にルーツを持つが、実は意外にも日本で独自に発展した伝承医療だ。いまでは医師の9割が日常的に使用しているほど身近な薬となっている。

「中国の医学が日本に渡ってきたのは遣唐使・遣隋使の頃。それから日本は中国と別の歩みで漢方を発展させてきました。中国で「漢方」と言っても、通じません。それほど、日本と中国の中医は異なります」

こう話すのは、慶應義塾大学医学部漢方医学センター・副センター長の渡辺賢治医師だ。同センターは1993年に漢方外来を開設。多いときで、年間約140

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家 国内外問わずさまざまな医療現場を積極的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでよりよい医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.jp

0人の患者に対し、漢方治療を行っている。

渡辺医師は漢方の優れた点を「個人差と時間軸を重んじる」と説明する。「漢方には「証」という独自の概念があります。これは患者さん一人ひとりの体質のことで、漢方薬はその証に合わせて処方されます。まさにオーダーメイド医療なのです」

一方の「時間軸」は、病気の進行度に合わせて漢方薬を処方することだが、これはインフルエンザで例えるとわかりやすい。インフルエンザにかかると、まずは寒気に襲われ、それから熱が出て汗をかき、それぞろの状態によって漢方薬を変える必要があるのだ。「風邪に葛根湯」と言うのが、葛根湯が効くのは、ゾクッ



これが「自動問診システム」。質問は約150項目あり、医師はここで自分の現状をチェックする

最近、漢方について科学的な検証が少しずつ始まっている。作用機序の一部が解明されたものや、有効性が臨床試験で確認されたものもある。インフルエンザの初期に使う麻黄湯や、手術後の腸閉塞予防に用いる大建中湯では、すでに有効性が

科学的にも分かってきた漢方薬の有効性

実証されている。抗がん剤の副作用の予防や認知症の周辺症状（徘徊など）でも、効果が確かめられている。内科だけでなく、外科も漢方薬を使う時代なのだ。「漢方は、西洋薬が不得意とする症状、病気に対する治療だけでなく、西洋医療を補完する医療としても注目されています。西洋医学が向いている治療と、漢方が向いている治療、お互いは相反するものではなく、らせんを描きながら一緒に進化していくものだと考えています」（渡辺医師）

漢方は体の防衛機構を高め、自律神経のバランスをとって、調和のとれた体をつくることを治療の目的とします。症状や病気ではなく、その人全体をみる「全人的医療」なんです。その結果、体質が改善してアレルギー反応が抑えられたり、過緊張が抑えられて眠れるようになったりするので「す」（渡辺医師）

いままさに医療現場で求められている「全人的な医療」を大昔から実践しているのが漢方。患者にとってありがたいのは、漢方薬の処方には別途免許が必要になる中国や台湾とは違い、日本では西洋医学を学んだ医師が漢方薬を処方でき、健康保険が使えることだ。今後は漢方の考え方に基づいて処方できる医師の育成が課題だが、それを補う取り組みを、渡辺医師は始めている。「自動問診システム」の開発だ。これは、患者が自覚症状について質問に答えると、その結果に応じた漢方薬の選択を支援するシステムで、同センターではすでに日常診療に応用、今後は5施設が導入する予定だ。「このシステムには漢方の専門家の知識が集約されています。漢方に馴染みのない医師にも、できるだけ漢方の考え方に沿った処方ができるようにと考案しました」（渡辺医師）